

令和4年産乾椎茸春子生産量1,600トン

- 前年対比78%の生産量 -

全国農業協同組合連合会 麦類農産部

全国農業協同組合連合会と一般財団法人日本きのこセンターは5月13日(金)に、令和4年産乾椎茸春子作柄決定会議を開催した。

全国の観測点作況データの収集分析、生産者からの聴取り調査及び林野庁の特用林産基礎資料を考慮し、生産量と品柄比率を決定した。

【生産量】

全国で1,600トン（前年比78%）と推定した。（前年生産量を2,050トンに修正）

令和3年

9月～10月中旬：気温は高く、降水量は全国的に少なかった。

10月下旬～11月上旬：中温菌から中低温菌の順に発生が始まった。その後の降雨により、低中温菌も発生し、芽数も増えた。

12月：気温は低く、降水量も少なく、年内の収穫は少なかった。

令和4年

1月：気温は低く推移した。

2月～3月上旬：極度に気温が低く、降雨もほぼ無かったことから、10日～20日程度芽切・発生が遅れた。そのため、収穫量が少なかった。

3月中旬～4月上旬：気温は高く推移し、一時的に降雨はあったが、ピークらしい時期はなく、まとまった収穫には至らなかった。

4月中旬～：降雨はあったものの作柄が回復するほどの状況には至らなかった。

【品柄状況】

1月中旬～3月上旬：気温は低く、降水量が少なかったため「小葉～中葉の厚肉系」の比率が高く、1箱あたりも重い傾向にあった。雨が少なく、極端に品質を落とすといった状況は少なかった。

3月中旬～：気温の上昇と断続的な降雨により「中葉以上の中肉系」の比率が高まった。

なお、近年気候変動が大きいのが、早い段階から散水など栽培管理を的確に実施した生産者は、生産量・品質ともに確保することができている。

【作柄特徴】

東高西低の傾向

2年ほど木：発生のバラつきが大きい

3年ほど木：発生は安定

4年ほど木以上：発生は少ない

また、近年の植菌量の減少により、用役ほど木本数が前年比1割近く減少していることも減産の大きな要因となった。

【生産指数】

令和4年産春子 地域生産指数（前年を100とする）

地域	九州	四国	中国	近畿	東海・北陸	関東	東北・北海道	全国
指数	78	71	75	88	91	※112	142	78

※印：出荷自粛の生産地を考慮した指数

【品柄状況】

令和4年産春子 品柄比率

品柄	大葉系	中葉系	小葉系	計	厚肉系	中肉系	計
本年	11	41	48	100	53	47	100
前年	15	42	43	100	47	53	100